

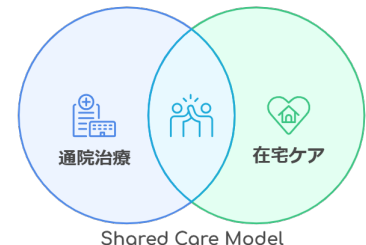
通院がん患者ホームケア体制構築プロジェクト —Shared Care Model と看護師学習プログラムの開発—

看護学科 地域看護学領域 村川 奨 助教



Q. どのような研究をされていますか？

A. 近年、医療費削減や患者の QOL 向上を背景に、通院治療を受けながら在宅で生活するがん患者が増加しています。治療後の管理の場も病院から在宅へシフトしてきていますが、十分に在宅ケアが受けられる体制は確立されていません。本プロジェクトでは、通院がん患者のホームケア体制を構築するべく、【病院-在宅をつなぐシェアードケアモデル（Shared Care Model: SCM）の開発】と【外来看護師・訪問看護師を対象とした学習プログラムの開発】の2つの研究を展開しています。



Q. これまでどのような研究をされてきましたか？

A. これまで、地域の訪問看護ステーション同士の連携体制構築に関する研究を行ってきました。設置主体が異なる医療機関同士の連携では、方針の違いなど他組織ならではの障壁があることが明らかになりました。本研究で開発を目指すモデルには、他職種他組織との連携が前提となるため、その関係性はより複雑化します。そこで、通院がん患者や外来看護師、訪問看護師、治療医、在宅医などのステークホルダーを対象に連携体制の課題についての調査を実施しています。また、民間企業と共同してオンラインコミュニティ：看看連携を考える会 (<https://www.kankan-lab.com/>) を発足しました。連携に関心を持つ全国の医師、看護師、患者、研究者が集い、理想的な連携体制についての意見交換を進めています。

通院がん患者支援の質向上には、看護師のスキルアップも不可欠です。効果的な学習プログラムの開発に向けて、支援の中心となる外来看護師・訪問看護師への学習ニーズの調査を行っています。外来看護師は在宅療養環境の理解や訪問看護の制度に関する知識不足を感じており、訪問看護師は最新のがん治療や副作用管理に関する知識の必要性を感じていることが明らかになっています。

Q. 将来の展望をお聞かせください。

A. 諸外国では『連携ケアによる病院サービス需要の減少』が政策目標として掲げられ、在宅ケアへの移行に向けた様々な取り組みが行われています。今後は、諸外国で有効性が示された連携モデルを視察し、日本の医療システムにおける実現可能性を検討した上で、開発するモデルに取り入れたいと考えています。

将来的には、開発したモデルと学習プログラムの効果を検証し、様々ながん診療連携拠点病院や地域の訪問看護ステーションに実装し、地域包括ケアシステムにおけるがん患者支援の標準モデルとして確立していきたいと考えています。

もう少し知りたい！と思った方はこちらへ

- ・地域看護学領域 URL

➡ https://web.sapmed.ac.jp/jp/school/health/course/ns/ns_chiiki.html

- ・大学院保健医療学研究科看護学専攻〇〇〇〇看護学 URL

➡ https://web.sapmed.ac.jp/jp/school/graduate/health/g_ns/ahfmc00000014r0.html